

ジャン＝ジャック・ルソー 『対話』の四草稿をめぐる歴史的概要

土橋 友梨子

【キーワード：①『対話』 ②草稿 ③執筆過程】

はじめに

多くのルソー研究者は、『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く——対話』*Rousseau juge de Jean-Jacques, Dialogues* (1782、以下『対話』と略記)という作品について何かを論じようとするとき、まずはじめに作者ジャン＝ジャック・ルソー Jean-Jacques Rousseau (1712–1778) の迫害妄想に焦点を当て、この作品がこれまでの長いルソー研究史のなかで、精神を病んだ者の狂気の産物として敬遠され続けてきた作品であったこと、あるいは位置付けが困難な作品であったことを述べるだろう。作品と作者に対するこのような不当な判断は、20世紀も半ばを過ぎた頃、ミシェル・フーコーやジャン＝マリー・グールモらの研究¹⁾によってようやく解消されることとなり、近年では『対話』に特化した雑誌特集が組まれるなどして、『対話』研究は徐々に充実し始めていると言える²⁾。

しかしながらそれでもなお、ほぼ手つかずのまままでとどまっている研究分野が『対話』には残されている。それは『対話』の生成研究である。すでにプレイヤー版全集の校訂者ロベール・オスモンがヴァリアントを作成し、決定稿とその他二つの自筆清書原稿を用いて『対話』が書かれたおおよその年代を提示してはいるが、彼の年代推定が正確であ

るとは言い難い。なぜなら執筆時期を明らかにするためには、草稿が必要不可欠な資料であるにもかかわらず、『対話』には約230年ものあいだ研究者の目に触れることがなく、現在でも未校訂の自筆清書原稿が存在するからだ。この草稿は BNF 草稿と呼ばれる³⁾。

草稿や執筆過程に関して、これまでに数多くの研究がなされている『告白』 *Les Confessions* (第一部 1782、第二部 1789) の豊富な研究史と比較してみると⁴⁾、『対話』研究はあまりにも貧弱である。そこで本稿では、これまでに明らかにされてはいるが、各研究者たちによって断片的にしか示されていない草稿情報の整理を行い⁵⁾、そこに新たな資料の情報を加え、今後の生成研究のための基盤を整えることを目指す。また同時に、未校訂の BNF 草稿を活字に起こす作業の一端を示し、『対話』の生成研究の可能性に新たな光を当てる。

1. 草稿の歴史

1-1 『対話』の草稿

『対話』には現在、わずかな下書きと四つの自筆清書原稿が残されている。以下ではそれらの所蔵図書館、整理番号、草稿の委託者、出版、構成を示す⁶⁾。次章からの説明の際に適宜参照してほしい。

下書き les fragments de brouillon

所蔵： ヌーシャテル公立・大学図書館 la Bibliothèque publique et universitaire de Neuchâtel

1795年2月、ピエール＝アレクサンドル・デュ・ペルー
Pierre-Alexandre Du Peyrou による寄贈

La cote : MsR. 79, 21

BNF 草稿 le manuscrit de BNF

所蔵： フランス国立図書館 la Bibliothèque nationale de France

1995年（あるいは1996年）から所蔵

La cote： NAF25700

委託者： 1776年 2月24日（失敗に終わる）

パリのノートルダム寺院の祭壇 le grand Autel de l'Eglise de
notre Dame de Paris

1776年 2月25日（？）

エティエンヌ・ボノ・ド・コンディヤック Étienne Bonnot de
Condillac

出版： なし

構成： 「摂理への寄託」

ノートルダム寄託の失敗について（後の「さきの著作のてん
まつ」）

「題名、エピグラフ、序文」

「目次」

「この作品の主題と形式について」

「第一対話」

「第二対話」

「第三対話」

ロンドン草稿 le manuscrit de Londres

所蔵： 大英図書館 British Library

1781年 1月 5日、ブルック・ブースビー Brooke Boothby によ
る寄贈

La cote： Ms. 4925

委託者： 1776年 4月 6日

ブルック・ブースビー

出版： リッチフィールド、1780年 6月

構成： 「題名、エピソード、目次」

「序文」

「この作品の主題と形式について」

「第一対話」

ノートルダム寄託の失敗について（後の「さきの著作のてんまつ」）

「摂理への寄託」

パリ草稿 le manuscrit de Paris

所蔵： 国民議会図書室 la Bibliothèque de l'Assemblée nationale

1819年から、ピエール＝ポール・ドリュオン Pierre-Paul Druon によって管理されていたフランス下院図書室 la Bibliothèque de la Chambre des députés（現国民議会図書室）に所蔵される

La cote： 1493

委託者： アンジヴィエ伯爵 le comte d'Angiviller

出版： なし

構成： 「序文」

「読者へ」（「この作品の主題と形式について」）

「第一対話」

「第二対話」

「第三対話」

「さきの原稿のてんまつ」

「さきの文中で語られた回状の写し」

ジュネーヴ草稿（決定稿） le manuscrit de Genève

所蔵： ジュネーヴ図書館 la Bibliothèque de Genève

1835年、アメリー・ストレッカイゼン＝ムルトゥー Amélie

Streckeisen-Moultou（ムルトウーの孫娘）による寄贈

La cote : Ms. fr. 221-223

委託者：1778年 5月15日

ポール＝クロード・ムルトウー Paul-Claude Moultou

出版： ジュネーヴ、1782年

構成： 「序文」

「この作品の主題と形式について」

「第一対話」

「第二対話」

「第三対話」

「さきの著作のてんまつ」

「さきの文中で語られた回状の写し」

1-2 『対話』の執筆過程の素描

ここでは先行研究で明らかにされている『対話』の成立過程を素描する。オスモンによると、1772年に『対話』の執筆を開始したルソーは、たえずテキストに修正を加えながら、その年に「第一対話」を、1773年と1774年の一部に「第二対話」を、1774年から1775年にかけて「第三対話」を、それから1775年の終わりに「この作品の主題と形式について」を執筆し、1776年4月には「さきの文中で語られた回状の写し」を何枚も写しては道行く知らない人々に配り、5月にはそれらを友人たちに送った。そして最終的に、1776年の7月に「さきの著作のてんまつ」を書き上げたようだ。1776年には、今日では失われてしまったこれらの下書きをもとに清書を開始し、BNF 草稿を2月に、ロンドン草稿を4月に、パリ草稿を6月に、ジュネーヴ草稿を夏に完成させたと推定されている。4度にもわたる清書の繰り返しは、この原稿を誰に委ねるべきであるのか、という問題に深く関わるだろう。とりわけノートルダム寺院の祭壇への原稿の寄託とその失敗は重要な出来事であったと思われる。

この出来事についてルソーは「さきの著作のてんまつ」のなかで以下のように語っている。無実の人ルソーは、人間たちの中にはもはや不実と虚偽しか見いだせなかつたので、この作品の運命についてただ摂理にのみ従うことを決心し、パリのノートルダム寺院の祭壇にこの草稿を寄託しようとした。なぜならこの行為の評判によって、自分の原稿が王の目に届くことを切望していたからである。そして1776年2月24日土曜2時、彼はノートルダムにやってきた。しかし普段は開かれているノートルダム寺院内の内陣に入るための柵が、彼を拒否するかのごとくその日だけ閉ざされていた。ルソーは眩暈がし、取り乱し、そしてノートルダムをあとにする。だが彼固有の物の考え方から気を取り直し、今度はその草稿を同時代の哲学者であるコンディヤックに託すために、彼のもとに向かったのだ⁷⁾。この劇的な、そして甚だ奇妙な出来事の前と後に清書された原稿間に見られる加筆や削除や修正は、今後内容を検討する際に極めて重要になると考えられるだろう。

ルソー自身は『対話』を執筆していた時期を「この対話に専念しているあいだにも消えることのなかつた胸を締め付けるような苦しみにもかかわらず、私は4年ものあいだこれらの対話に打ち込んでいた⁸⁾」と形容しており、この時期が『演劇に関するダランベール氏への手紙』*Lettre à M. d'Alembert sur les spectacles* (1758)、『新エロイーズ』*Julie ou la Nouvelle Héloïse* (1761)、『エミール』*Émile ou de l'éducation* (1762) や『社会契約論』*Du Contrat Social* (1762) などの代表作を精力的に執筆しては、次々に世に送り出していた1756年から1762年までのそれとは精神状態も執筆の速度も比較できないことは確かである。ただし、たとえルソー自身が作品完成のために多くの苦痛を伴い、長い時間がかかったと述べているとしても、この時期のルソーは狂気じみた『対話』という作品にばかり身をやつし、精神をすり減らしていたのではなく、一方ではつましく楽譜を写す仕事(写譜)や作曲といった、彼が生涯愛してやまなかつた音楽の仕事にも情熱を燃やしていたことを忘れてはならない。

1-3 四草稿の詳細とその運命

1776年2月までに清書が終えられていた草稿は、現在BNF草稿と呼ばれている。BNF草稿はノートルダム寺院への寄託失敗後の翌日2月25日⁹⁾に、「原稿の真の受託者を示す摂理の指示」に従ったルソーによって、「もっとも古い知人である一人の文学者」コンディヤックに手渡された。約二週間後、再びコンディヤックのもとを訪れたルソーは、「20年来私の目にかぶせられていた闇のヴェールが落ちんとする瞬間がきた」ことを確信していたが、『対話』読後のコンディヤックの返答は彼が望むようなものではなかった。ルソーは落胆するも、コンディヤックにこの原稿の保管を求めた¹⁰⁾。そこでコンディヤックは保管のために『対話』の原稿を封筒に入れ、以下のことをその表に記したのだった。

この封筒の中にある原稿は私のものではない。これは寄託されたものである。それを私に託してきた人は、この小包が今世紀が終わるまで開封されないことを求めている。そして私は彼の意志が効果を発揮するために自分のできる限りのことをすると約束した。それゆえに1800年になる前にこの包みを開けることを禁ずる。そして私は自らが相続人として指名する人をその保管者とする。

フリュ城館にて、1776年6月1日
コンディヤック¹¹⁾

ルソーの死後、『ルソー全集』出版のためにジラルダン侯爵 le marquis de Girardin がコンディヤックにその原稿を求めたが、コンディヤックはルソーの意志を尊重し、18世紀が終わるまでは公開しないとジラルダンに返信して保管を続けた¹²⁾。そして1780年8月3日にボージャンシーでコンディヤックが亡くなると、姪であるサント＝フォワ夫人 M^{me} de Sainte-Foy が原稿の管理を引き継ぎ、1800年12月31日（共和暦 le 10 nivôse an IX¹³⁾）に、シモン・ラッソー Simon Lasseux 市長、ニコラ＝フ

ランソワ・テュルペタン Nicolas-François Turpétin 小郡治安判事、そしてジャック＝ニコラ・ペリユ Jacques-Nicolas Pellieux 司祭らと共に、5つの封蝋で閉じられていた封書を開封した¹⁴⁾。

封書開封の様子は、1800年12月31日付のラッソー市長の手紙によってロアレ県知事ジャン＝フィリベール・マレ Jean-Philibert Maret に知らされたのち、1801年1月5日 (le 15 nivôse an IX) にロアレ県知事はその写しを内務大臣であるジャン＝アントワヌ・チャプタル Jean-Antoine Chaptal に送ったが、チャプタルからは1801年1月28日 (le 8 pluviôse an IX) 付の受取り通知書によるそっけない返事しかもらうことができなかった。

封書開封のあと、ペリユ司祭は1782年と1793年に出版された『対話』とコンディヤックに託された『対話』の原稿を比較し、その差異を綿密に検討した。そこから得られた結果¹⁵⁾と作家の意図に従って、この原稿を出版すべきであるという旨を内務大臣であるチャプタルに伝えてもらうために、彼は1801年1月22日 (le 2 pluviôse an IX) にマレ県知事に手紙を書いている。1801年1月29日 (le 9 pluviôse an IX)、マレ県知事はチャプタルにその内容を記した手紙を送るが、返事は前回とさほど変わらなかった。そして不幸なことにペリユ司祭は最終的にはそれを出版することなくこの世を去ってしまった (1831年)。これらは1913年にジャック・ソワイエ Jacques Soyer によって公表されており、この論考は BNF 草稿に関する数少ない資料のうちの一つとなっている¹⁶⁾。

その後、この草稿は1867年にはまだボージャンシーで保管されていたことが確認されているが、政府に譲渡することとなった。どのような経緯であるのかは不明であるが、1925年にはロシャンボーのコレクションの中に含まれていることが確認された。そして1948年4月20日の競売後、個人所蔵になったためにフランス国立図書館に所蔵されるまでどこで保管されていたのかは明らかにされていない¹⁷⁾。

1995年 (あるいは1996年¹⁸⁾) からはパリにあるフランス国立図書館

で所蔵されており（整理番号 NAF25700）、旧フランス国立図書館（リシュリュウ）ではマイクロフィルムにてこの原稿を閲覧することができる。そして現在はフランス国立図書館が運営する Gallica でも閲覧可能となっている¹⁹⁾。

次に、1776年4月上旬に清書が終えられたと推定されている「第一対話」のみの原稿は、現在ではロンドン草稿と呼ばれ、同月6日にイギリスの若き詩人ブルック・ブースビーに託された。1777年8月10日付のブースビーの手紙によると、ルソーは『対話』が英語に翻訳されることを望み、ブースビーに作品の続きを送る期日さえ設けていたようだ²⁰⁾。しかし、結局ルソーは彼に続きを渡すことはなかった。この原稿には、イギリス人に託そうとしたためか、ロンドン草稿にしか見られないルソーによる注が一つあり、そこにはさらに校訂者であるブースビーによっても注釈が付けられている²¹⁾。

ブースビーはルソーの死後、出版を思いとどまるようにというジラルダンからの説得にもめげず、リッチフィールドで1780年に『対話』を出版する。ブースビーはこの版に「出版者の序文」を付け²²⁾、先の注釈を加えた以外はルソーの原稿にほとんど変更を加えなかった。この「第一対話」は初版が出版された同じ年に版を重ねたが、現在、1780年に出版された初版以外の版のいくつかをインターネット上でも閲覧することができる²³⁾。不思議なことに、出版されたこの本は、ほとんどルソーの手稿に忠実ではあるものの、「第一対話」しか含まないためか、初版以外は題名の *Dialogues* に « s » が付けられていない。この草稿はブースビー自身によって、1781年1月5日にロンドンの大英図書館（整理番号 Ms. 4925）に所蔵されることとなった。

1776年6月、三番目に清書が終えられたとされているバリ草稿であるが、この草稿は現在国民議会図書室（整理番号 1493）に所蔵されてい

る。この草稿が国民議会図書室に所蔵されるまでの経緯も BNF 草稿と同じように多くの謎に包まれており、研究者たちによる情報も錯綜しているように思える。パリ草稿について現時点で言えるのは、ルソーによってアンジヴィエ伯爵に送られた『対話』の原稿がパリ草稿なのではないかということと²⁴⁾、パリ草稿の表紙の内側に付されている一枚の紙に書かれている人々の名がこの草稿のかつての所有者を示しているのではないかということである²⁵⁾。国民議会図書室の見解は、フィリップ・スチュアートの研究に従って、パリ草稿の所有者の一人と考えられているクラマイエル家の一人の夫人 *une dame de la famille de Cramayel* と、アンジヴィエが親類・個人的関係にあるために、アンジヴィエの手元にあった原稿が夫人の手に渡り、のちに国民議会図書室に所蔵されることになったのではないかと、つまりアンジヴィエが所有していた原稿とパリ草稿は同じ原稿であるというものである²⁶⁾。しかしながら、2011年にオノレ・シャンプションから出版された『対話』の序文でスチュアートは、なぜかこれとは正反対の見解を示している²⁷⁾。

パリ草稿は1819年（あるいは1812年²⁸⁾）に800フランで獲得され、ドリュオンによって管理されていたフランス下院図書室（現国民議会図書室）に所蔵された。この草稿も BNF 草稿と同様、現在は Gallica と国民議会のサイトで閲覧することができる²⁹⁾。

現在決定稿とみなされているジュネーヴ草稿は最後に清書されたもので、1776年夏に写し終えられたと推定されている。この原稿はルソーが最後まで手元に残し、1778年5月15日にムルトゥーに手渡された。ジュネーヴ草稿は三巻からなっており、ジュネーヴ図書館に所蔵されている (Ms. fr. 221-223³⁰⁾)。ルソーの死後1782年にムルトゥーとデュ・ペールによって『ルソー全集』*Collection complète des Œuvres de J. J. Rousseau* の第11巻に「回想録第二部」として『対話』は収載されることとなるのであり³¹⁾、「第一対話」から「第三対話」までのすべてを含

んでいるこの版を初版とみなすのが一般的である。ベルナル・ガニユバンによると、初版ではムルトゥーによって文章13カ所と「第二対話」、「第三対話」の注が削除されているという³²⁾。

それ以降の『対話』出版の詳細は今後の課題としたいのであるが、簡潔にまとめると『対話』は、1959年に自伝的作品のひとつとしてプレイヤード版全集の第一巻に、そして1967年にスイユから出版された全集でも同じように、『告白』と『孤独な散歩者の夢想』と共に自伝的作品として収められた。1962年にはこれまでの批評を刷新したフーコーによる序文が付された版がアルマン・コランから、1999年にはフラマリオンから、そして2011年にはオノレ・シャンピオンから新たな版が出版され、今後クラシック・ガルニエによる出版が待たれている（2015年刊行予定）。

2. 草稿の検討

2-1 『対話』の構成

各草稿の構成については上述の通りであり、ここではそれぞれに説明を加えていく。また必要な場合には BNF 草稿とその他の草稿の差異を示そうと思う。(B) はBNF 草稿、(L) はロンドン草稿、(P) はパリ草稿、(G) はジュネーヴ草稿を指す。紙面の都合上、本稿では表記をすべて BNF 草稿に合わせている。ただし、ここで示すものは草稿をありのままに転写する「再現型転写³³⁾」ではないため、二重傍線や飾り、文字の大きさ (ex. (B) の「撰理への寄託」では « Providence éternelle » という単語の文字は大きく書かれている)、配置などの正確な再現、大文字と小文字の差異 (ex. « Providence », « providence », etc.)、句読点の差異 (« . », « , », « ; », « : », « ! », « ? », etc.)、アクサンの有無 (ex. « défenseur » と « d'enseur », etc.)、同じ語の綴りの差異 (ex. « j'attends » と « j'attens »、

etc.)などは逐一示していないということをあらかじめ断っておく。

2-1-1 「摂理への寄託」

「摂理への寄託」Dépot remis à la Providence はすべての草稿においてこの表記である。BNF 草稿ではその表紙に付されており、ロンドン草稿では巻末に載せられている。パリ草稿・ジュネーヴ草稿では「さきの原稿／著作のてんまつ」内にある。

各草稿間の差異について言えば、BNF 草稿とその他の草稿の間にはいくつかの差異が確認できるが、これらの差異が内容に大きな変化を及ぼしているとは考えにくい。しかし修正箇所を見る限り、BNF 草稿以降に清書された三草稿には書き直しが少ないことが分かる。

BNF 草稿

Dépot remis à la Providence.

Protecteur des opprimés, Dieu de justice et de vérité, reçois ce dépôt qu'apporte à^a ton Autel et confie à ta Providence un étranger infortuné, seul, sans appui sans défenseur sur la terre, outragé, moqué, diffamé, trahi par^b toute une generation, chargé depuis quinze ans à l'envi de traitemens pires que la mort et d'indignités inouïes jusqu'ici parmi les humains, sans avoir pu jamais en apprendre au moins la cause. Toute explication m'est refusée, toute communication m'est ôtée ; je n'attends plus des hommes, aigris par leur propre injustice, qu'affronts mensonges et trahisons. Providence éternelle, mon seul espoir est en toi. Daigne prendre mon dépôt sous ta garde, le faire tomber^c en des mains fidelles et jeunes^d, qui le transmettent exempt de fraude à une meilleure génération ; qu'elle apprenne, en déplorant mon sort, comment fut traité par celle-ci un homme sans fiel et sans fard, ennemi de l'injustice^e, mais patient à l'endurer, et qui jamais n'a fait ni voulu ni rendu de mal à personne. Nul n'a droit, je le sais, d'espérer un miracle, pas même l'innocence opprimée et

méconnue. Puisque tout doit rentrer dans l'ordre un jour, il suffit d'attendre. Si donc mon travail est perdu, s'il doit être livré à mes ennemis et par eux détruit ou défiguré, comme cela paroît inévitable ; je n'en compterai pas moins sur ton œuvre, quoique j'en ignore l'heure et les moyens ; et après avoir fait, comme je l'ai dû, tous mes efforts^f pour y concourir, j'attens avec confiance, je me repose sur ta justice, et me résigne à ta volonté.

^a (L), (P), (G) ce depot que remet sur

^b (L), (P), (G) trahi de

^c (P), (G) et le faire tomber

^d (L), (P), (G) des mains jeunes et fidelles

^e (L) de toute injustice

^f (P) tout mes efforts, (G) mes efforts

2-1-2 ノートルダム寄託の失敗について（後の「さきの著作のてんまつ」）

先述した通り、ルソーは『対話』をパリのノートルダム寺院の祭壇へと寄託しようとしたが、それはむなしくも失敗に終わった。この失敗はパリ草稿の「さきの原稿のてんまつ」*Histoire du précédent Manuscrit* とジュネーヴ草稿の「さきの著作のてんまつ」*Histoire du precedent de cet écrit* 内で詳細に描写された。これら二つはそのタイトルが異なりはするものの、内容は同じで、両者の間には内容に影響を及ぼすほどの差異は見られない。ただしパリ草稿には一つだけジュネーヴ草稿には見られない注がある³⁴）。

また、ルソーはこの失敗について、「さきの原稿／著作のてんまつ」と比べると簡潔にはあるが、BNF 草稿やロンドン草稿内でも言及している。BNF 草稿とロンドン草稿についても、すでにオスモンがプレイヤード版全集の注釈で触れており、BNF 草稿とロンドン草稿を書き写しているが³⁵）、彼は BNF 草稿内にあるルソーが付けた注を見落とし

ているため、ここではその注を含めて示そうと思う。BNF 草稿内でこの注はページ下部に添えられている。ここで興味深いのは、各草稿を比較したとき、たとえパリ草稿とジュネーヴ草稿で「このアイデアと祭壇への委託のアイデアはルイ15世が存命している時からあった。そしてそれは少し滑稽であった³⁶⁾」とルソーが述べていたとしても、BNF 草稿とロンドン草稿では『対話』の原稿が王の目に届くことを切望するようなことは一切書かれていないことである。

さらに、注釈者が『対話』の執筆時期を明らかにしようとするとき、しばしば「さきの著作のてんまつ」内にある「4年のあいだ *durant quatre ans*³⁷⁾」という言葉を参照し、『対話』は1772年から1776年に書かれたと述べる。だが、もしもルソーのこの言葉だけがその根拠であったのなら、ここに BNF 草稿が新たに加わることで多少なりとも混乱を招くのではないだろうか。というのも BNF 草稿では、ルソーは「何年も前から *depuis plusieurs années*」、『対話』の準備に取り掛かっていたと年数を曖昧にして示しているからである。しかしながら、BNF 草稿の年代設定は、他の草稿と比較すると熟慮されていない場合がある。例えばパリ草稿・ジュネーヴ草稿の「第二対話」で、「ルソー」が「フランス人」に対して「人々が面白がって彼（「J. J.」）にお金のかかる旅行をさせた8年間に余儀なくされた出費³⁸⁾」の話をするのだが、これは1762年の『エミール』断罪から1770年にパリに戻ってくるまでの亡命生活のことを指していると考えられるだろう。BNF 草稿ではこの年数が「10年」と不正確なものになっている。そのためパリ草稿・ジュネーヴ草稿で『対話』の執筆期間を「4年のあいだ」と訂正したことによって、むしろ正確な年代が提示されたと言えるのかもしれない。

BNF 草稿

Je préparais cet écrit depuis plusieurs années sans imaginer aucun moyen de le garantir des mains de mes persecuteurs. Enfin ne voyant plus aucune

ressource de la part des hommes je resolu de le confier à la seule providence en la déposant sur le grand Autel de l'Eglise de notre Dame de Paris. J'aurois choisi pour cela le samedi 24 fevrier de la présente année 1776. Mais en voulant executer mon dessein je trouvai les grilles fermées* à l'entrée du corridor qui tourne autour du chœur et par lequel je comptois gagner une des portes latérales pour y entrer. Je ne pouvois tenter de traverser tout le chœur par l'entrée principale bien sur que le Suisse m'auroit retenu. Ainsi ne pouvant d'aucune part arriver à l'autel j'ai forcé de renoncer à mon projet, et il ne me reste qu'à me résigner à la volonté du ciel qui par un decret dont il ne m'appartient pas de sonder la profondeur semble favoriser en tous les complots des hommes pour la diffamation de ma personne et de ma mémoire. Je ne vois plus d'autre parti à prendre dans l'état où je suis réduit que de porter cet écrit toujours sur moi pour le remettre au premier inconnu pour qui mon cœur m'inspirera cette confiance. J'ose espérer encore que la providence daignera guider mon choix. Peut elle prendre un plus digne instament de son œuvre qu'un homme juste et vertueux ?

* Il est bon d'observer que jusqu'ici ce corridor n'avoit point été fermé. J'ajoute que dans tous les changemens qui se font à mon occasion, on tient toujours quelque pretexte tout prêt pour les motiver.

ロンドン草稿

Suit la copie de la suscription du Manuscrit contenant ces trois Dialogues que j'avois résolu de déposer à la seule garde de la Providence sur le grand Autel de l'Eglise de Notre Dame de Paris. Mais ayant voulu exécuter cette résolution le 24 Février 1776 je trouvai que par une précaution toute nouvelle on avoit fermé les grilles des bas-cotés qui environnent le Chœur et par lesquels seuls j'aurois pu pénétrer jusqu'à l'Autel. Je me vis donc forcé, sinon de renon-

cer à mon projet du moins de le changer, car je croirai l'avoir très heureusement rempli, si je trouve un dépositaire discret et fidelle. Est-il un plus digne instrument de l'œuvre de la providence que la main d'un homme vertueux ?

2-1-3 「題名、エピグラフ、序文」

BNF 草稿では、まず「摂理への寄託」、次にノートルダムへの寄託の失敗、それに次いで「題名、エピグラフ、序文」がくる。「題名、エピグラフ、序文」は同一のページに書かれている。一方ロンドン草稿は「題名、エピグラフ、目次」からこの作品が始まり、「序文」は次のページに書かれている（スチュアートはロンドン版の「序文」はあとから付け足されたのではないかと推察している³⁹⁾）。パリ草稿とジュネーヴ草稿にはこのページは存在せず、BNF 草稿とロンドン草稿の「序文」は「さきの原稿／著作のてんまつ」内に書かれている。そのためパリ草稿・ジュネーヴ草稿では、これらとは異なる「序文」がつけられている⁴⁰⁾。

ジャン＝フランソワ・ペランが指摘していることだが、驚くべきことに、現在われわれが目にする *Dialogues* という題名はロンドン草稿にし記されていない⁴¹⁾。

BNF 草稿

Rousseau Juge de Jean Jaques.

Barbarus hic ego sum, quia non intelligor illis.

OV. trist^a

Qui que vous soyez que le Ciel a fait l'arbitre de cet Ecrit, quelque usage que vous ayez résolu d'en faire, et quelque opinion que vous ayez de l'Auteur, cet Auteur infortuné vous conjure par vos entrailles d'homme^b et par les angoisses qu'il a souffertes en l'écrivant, de n'en disposer qu'après l'avoir lu tout entier. Songez que cette grace qu'implore de vous^c un cœur brisé de douleur, est un devoir d'équité que le Ciel vous impose.

^a (L) Rousseau Juge de Jean Jaques. / Dialogues / Barbarus hic ego sum, quia non intelligor illis. Ovid. Trist.

(P), (G) 題名、エピソードなし

^b (L), (P), (G) vos entrailles humaines

^c (L), (P), (G) cette grace que vous demande

2-1-4 「目次」

BNF 草稿では、ロンドン草稿とは異なり、「目次」Table des matières は独立して置かれている。ロンドン草稿とはわずかな違いが見られる。一方パリ草稿・ジュネーヴ草稿に「目次」は存在しない。実際は草稿に合わせたページ数も書かれているが本稿では省略し、配置も考慮に入れない。

BNF 草稿

Table des matières

Du sujet et de la forme de cet écrit.

Premier dialogue / Du système de conduite envers J. J. adopté par l'administration et approuvé du public^a

Second dialogue / Du naturel de J. J. et de ses habitudes

3^e dialogue / De ses Livres, et conclusion^b

^a (L) Du système de conduite envers J. J. adopté par l'administration avec l'approbation du public

^b (L) De l'esprit de ses livres et conclusions

2-1-5 「この作品の主題と形式について」あるいは「読者へ」

実際にはどの草稿にもページの冒頭に「この作品の主題と形式について」Du sujet et de la forme de cet écrit とは書かれていない。これまで出

版されてきた『対話』に「この作品の主題と形式について」と付けられていたのは、ロンドン草稿にあった「目次」から取られているのである。ただし、パリ草稿にのみ「読者へ」Au lecteur とあり、スチュアートがこの表記を採用している。「この作品の主題と形式について」の各草稿間に見られる差異に関しては、紙面の都合上、残念ながら本稿で紹介することはできないが数多く見られる。

2-1-6 「第一対話」 / 「第二対話」 / 「第三対話」

本稿では内容検討にまで立ち入ることができないためにそれらは今後の課題となるのだが、ここでは各草稿に付けられた題名を示す。

(B) Premier dialogue / Second Dialogue / Troisième Dialogue

(L) Premier Dialogue / Second dialogue / Troisième Dialogue

(P) Premier Dialogue / Dialogue Second / Troisième Dialogue

(G) Premier dialogue / Deuxième Dialogue / Dialogue Troisième

2-1-7 「さきの文中で語られた回状の写し」

「さきの文中で語られた回状の写し」 Copie du billet circulaire dont il est parlé dans l'écrit precedent は、「さきの原稿／著作のてんまつ」で述べられているパンフレットのことである。この写しはパリ草稿とジュネーヴ草稿にしか存在せず、ジュネーヴ草稿にのみ「いまだ正義と真実を愛する全フランス人へ」A tout François aimant encor la justice et la vérité と書かれている。

おわりに

本稿では、まず『対話』の執筆過程や草稿の行方等についての情報を統合し、そして次にこれまで未校訂であった BNF 草稿を加えたヴァリ

アントの一部を提示した。これらの作業を行う際に役立ったのがインターネットである。インターネットの活用は、今日において至極当然のことのように思われるが、これまでに参考文献として挙げられてこなかった資料の新たな発見、普段は手に取ることのできない貴重な資料（草稿・初版本等）へのアクセスを可能にするため、情報の取捨選択が前提であることは確かだが、研究の幅を広げ、研究をより迅速に行うための手段として非常に有効である。

その一方で、手作業の重要性も再認識した。自分自身でヴァリエントを作成する過程で、プレイヤー版全集のヴァリエントに多くの間違いを発見し、十分であるとは言えないが、それをスチュアートが補っていることを確認した。今後はこれまでの校訂者たちが作り上げてきたものを活用しながら誤りを訂正し、そこにBNF草稿のヴァリエントを加えることになる。そうすることで、『対話』の執筆過程を正確にし、『対話』に込められた作者ルソーの意図を新たな観点から分析することが可能となるだろう。

註

- 1) Michel Foucault, Introduction à *Rousseau juge de Jean-Jacques. Dialogues*, Armand Colin, 1962, pp. VII-XXIV ; Repris dans *Dits et écrits (1954-1988)*, Gallimard, 1994, tome I, pp. 172-188 ; Jean-Marie Goulemot, « Stratégies et positions dans les *Dialogues de Rousseau juge de Jean-Jacques* » dans *Romantische Zeitschrift für literaturgeschichte*, n° 3, 1979, pp. 113-121.
- 2) *Rousseau juge de Jean-Jacques. Études sur les Dialogues*, sous la direction de Philip Knee et Gérald Allard, *Pensée libre*, n° 7, Ottawa, 1998 (Réédition Honoré Champion, 2003) ; *Lectures de Rousseau. Rousseau juge de Jean-Jacques. Dialogues*, sous la direction de Isabelle Brouard-Arends, Presse Universitaire de Rennes, 2003 ; *Méthode !* 05, Billière, éd. de Vallongues, 2003 ; *Styles, genres, auteurs*, n° 3, Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, 2003 ; *Études Jean-Jacques Rousseau*, n° 17, Musée Jean-Jacques Rousseau-Montmorency, 2009 ; *Annales de la société Jean-Jacques Rousseau*, tome 49, 2010.
- 3) この名についてはジャン＝フランソワ・ペランにならって、この草稿が所

蔵されている図書館名（フランス国立図書館 Bibliothèque nationale de France）で呼ぶことにする。Jean-François Perrin, *Politique du renonçant : le dernier Rousseau, des Dialogues aux Rêveries*, Éditions Kimé, 2011, p. 276.

- 4) 例えば、Hermine de Saussure, *Rousseau et les manuscrits des Confessions*, Boccard, 1958 ; Charly Guyot, « Du manuscrit de Neuchâtel au manuscrit de Genève. Étude de quelques variantes du texte des *Confessions* » dans *Jean-Jacques Rousseau et son œuvre*, 1964 ; Frédéric S. Eigeldinger, « Préface des *Confessions* du manuscrit de Neuchâtel » dans *Bulletin de l'Association Jean-Jacques Rousseau*, 2002. また日本語で読めるものとして、井関麻帆「ルソーと『告白』の草稿——幼年期の記述をめぐって——」『文学』、岩波書店、2010年、218-224頁がある。

- 5) 本稿で用いた資料は以下の通り。

・フランス語資料：Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres complètes*, édition publiée sous la direction de Bernard Gagnebin et Marcel Raymond, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, 1959（以下 OC, I と略記）；Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres complètes*, œuvres autobiographiques, tome I, préface de Jean Fabre, présentation et note de Michel Launay, Édition du Seuil, 1967 ; Jean-Jacques Rousseau, *Dialogues de Rousseau juge de Jean-Jacques*, présentation, notes et dossier documentaire par Érik Leborgne, GF Flammarion, 1999 ; Jean-Jacques Rousseau, *Rousseau juge de Jean-Jacques, Dialogues*, Édition critique par Philip Stewart, Honoré Champion, 2011 ; Hermine de Saussure, *Etude sur le sort des manuscrits de J.-J. Rousseau*, Neuchâtel, 1974 ; *Dictionnaire de Jean-Jacques Rousseau*, publié sous la direction de R. Trousson et F. S. Eigeldinger, 1996 ; *Brouillons d'écrivains*, sous la direction de Marie Odile Germain et de Danièle Thibault, Bibliothèque nationale de France, 2001.

・日本語資料：ジャン＝ジャック・ルソー『ルソー全集』、小西嘉幸訳、第三卷、白水社、1979年；清水康子「ルソー年表」『ルソー全集』、別巻2、白水社、1984年。

また、各草稿によって用いた資料が異なる場合は以下の通り。

・BNF草稿：Jacques Soyer, « Qu'est devenu le manuscrit des *Dialogues* de Jean-Jacques Rousseau confié par l'auteur à Condillac ? » dans *Bulletins de la Société archéologique et historique de l'Orléanais*, t. XVI (1913), pp. 488-497 ; Denis Lottin, *Recherches historiques sur la ville d'Orléans*, Deuxième partie, tome 3, Orléans, 1840 ; Vergnaud-Romagnési, « Notice sur la vie et les ouvrages de M. Pellieux aîné, de Beaugency » dans *Annales de la société royale des Sciences, Belles-Lettres et Arts d'Orléans*, tome xii, 1832, pp. 272-280.

・パリ草稿：Rousseau et la Révolution, Gallimard, 2012.

- 6) なお、構成についてであるが、日本語訳はこれまでの翻訳を参考にしつつ拙訳部分もある。また見やすさを考慮し、手稿の時点では付けられていないタイトル（例えば「序文」など）をここでは示した。フランス語表記については第2章にて検討するためここでは省略する。
- 7) *Dialogues*, « Histoire du précédent écrit », *OC*, I, pp. 977-981.
- 8) *Dialogues*, « Histoire du précédent écrit », *OC*, I, p. 977.
- 9) この日付については、Louis-John Courtois, « Chronologie critique de la vie et des œuvres de Jean-Jacques Rousseau » dans *Annales de la société Jean-Jacques Rousseau*, tome 15, 1923, p. 230 を参照した。しかし『ルソー書簡全集』の注釈者はこの日付設定に疑問を投げかけている。*Correspondance complète de Jean-Jacques Rousseau*, établie et annotée par R. A. Leigh, Genève, Institut et musée Voltaire, 1965-1991, tome XL, 7076, entre le 16 et le 25 (?) mars 1776, p. 44. (以下、書簡を引用する際には「CC、巻数、書簡番号、日付、ページ」と略記する。)
- 10) *Dialogues*, « Histoire du précédent écrit », *OC*, I, pp. 981-982.
- 11) « les papiers qui sont sous cette enveloppe ne sont point de moi. c'est un dépôt. la personne qui me l'a confié, veut que ce paquet ne soit ouvert qu'après ce siecle révolu ; et j'ai promis de faire tout ce qui est en mon pouvoir pour que sa volonté ait son effet. défends donc d'ouvrir ce paquet avant l'an mil huit cent, et j'en fait dépositaire celui ou celle que je nommerai mon héritier. au château de Flux, le 1^{er} juin 1776. l'abbé de Condillac. »
<http://visualiseur.bnf.fr/Visualiseur?Destination=Daguerre&O=23013923&E=JPEG&NavigationSimplifree=ok&typeFonds=noir/> (BnF, Banque d'images du département de la reproduction, picture collection)
- 12) 前者 *CC*, tome XLI, 7238, début août 1778, pp. 125-126. 後者 *CC*, tome XLII, 7313, le 4 octobre 1778, pp. 4-22.
- 13) Denis Lottin, *op. cit.*, p. 330 では1801年1月1日 (le 11 nivôse an IX) となっているが、1800年12月31日付のラッソーの手紙が残っていることから、ソワイエの論考が正しいと考えられる。
- 14) <http://visualiseur.bnf.fr/Visualiseur?Destination=Daguerre&O=23013924&E=JPEG&NavigationSimplifree=ok&typeFonds=noir/> (BnF, Banque d'images du département de la reproduction, picture collection).
- 15) この手紙の中で彼がとりわけ注目した差異は、ウルス通りでの滑稽なスイス祭りの描写の有無、「さきの著作のてんまつ」の長さや位置、王のもとにまで原稿が届いて欲しいという願望の三点である。ペリユにとってBNF 草稿には存在しないこれらの描写は、子どもじみでいて、愚痴っぽく、ジャン＝ジャックの評判を貶めると考えられるものであったようだ。

- Jacques Soyer, *op. cit.*, pp. 492-493.
- 16) Jacques Soyer, *op. cit.*, pp. 488-497.
 - 17) Hermine de Saussure, *op. cit.*, pp. 38-41 ; *Correspondance générale de Jean-Jacques Rousseau*, annotée et commentée par Théophil Dufour et Pierre-Paul Plan, Éd. A. Colin, 1924-1934, t. XX, p. 374 ; Bernard Gagnebin, « Notices bibliographiques », *OC*, I, p. 1902.
 - 18) 所蔵年については、BnF サイト内の Trésor en datations à la BnF : 1968-2008 には1995年とあり、同じく BnF より出版されている *Brouillons d'écrivains*, *op. cit.*, p. 31 には1996年とある。
 - 19) <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8426795c.r=rousseau+dialogues.langFR/> (Gallica).
 - 20) *CC*, tome XL, 7131, le 10 août 1777, pp. 140-144.
 - 21) ルソーによる注は *OC*, I, p. 1640, (e) を、ブースビーによる注釈は *OC*, I, p. 1641, note. 4を参照。
 - 22) ブースビーによる序文は1782年に出版された『ルソー全集』にも付されており、現在もっとも手に入りやすい版の一つである Érik Leborgne, *op. cit.*, pp. 463-466 で読むことができる。
 - 23) プレイヤード版全集によると、初版以外で1780年に出版された『対話』は三つある。それについては Bernard Gagnebin, « Notices bibliographiques », *OC*, I, p. 1905 参照。そこで示されている29と30は Google Books で閲覧可能である。また、30については Kessinger Publishing よりリプリント出版もされている。
 - 24) *CC*, tome XLII, 7313, le 4 octobre 1778, p. 19.
 - 25) « Le manuscrit de J. J. Rousseau intitulé : Rousseau juge de Jean Jacques a été donné par l'auteur à une dame de la famille de Cramayel qui le donna elle-même à M. de Clerigny ancien administrateur des Domaines de la Couronne. Celui-ci le donna à M. de la Chapelle ; il est ensuite passé à M. de Flobert. », *OC*, I, p.1903 ; Philip Stewart, *op. cit.*, p. 43 を参照。画像は Assemblée nationale あるいは Gallica の該当ページを参照のこと。
 - 26) <http://archives.assemblee-nationale.fr/bibliotheque/dialogues/index.htm/> (Assemblée nationale).
 - 27) Philip Stewart, *op. cit.*, p. 43.
 - 28) Assemblée nationale のサイトでは1812年となっているが、ルソー生誕300年を記念して Assemblée nationale での展示のカタログ *Rousseau et la Révolution*, *op. cit.*, p. 187 では1819年となっている。
 - 29) http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b84471599.r=rousseau+dialogues.langFR (Gallica), <http://archives.assemblee-nationale.fr/bibliotheque/dialogues/index>

.htm/ (Assemblée nationale).

- 30) 残念ながら『対話』の草稿を閲覧することはできないが、現在ジュネーヴ図書館のサイトでは、『告白』と『社会契約論』の草稿を閲覧することができる。http://ville-ge.ch/bge/bibliotheque_numerique/ms_rousseau.html/ (BGE).
- 31) ジュネーヴ図書館のサイトでは『ルソー全集』初版も閲覧できる。<http://www.e-rara.ch/rousseau/nav/classification/2205972/> (BGE).
- 32) Bernard Gagnebin, « Notices bibliographiques », *OC*, I, p.1905.
- 33) 草稿の転写には、①「変換型転写」transcription linéaire（特殊な記号によって加筆や削除を示しつつ、作家の意図を推定して組み替えたもの）②「再現型転写」transcription diplomatique（できる限り草稿のありのままの姿を再現したもの）という二種類の方法がある。田口紀子・吉川一義『文学作品が生まれるとき——生成のフランス文学——』、京都大学学術出版会、京都、2010年、402頁。
- 34) *OC*, I, p. 1760.
- 35) *OC*, I, p. 1749.
- 36) *Dialogues*, « Histoire du précédent écrit », *OC*, I, p. 981.
- 37) *Dialogues*, « Histoire du précédent écrit », *OC*, I, p. 977.
- 38) *Dialogues*, « Deuxième Dialogue », *OC*, I, p. 837.
- 39) Philip Stewart, *op. cit.*, p. 42.
- 40) *Dialogues*, *OC*, I, p. 659.
- 41) 詳細は Jean-François Perrin, *op. cit.*, pp. 275-279.

Un aperçu historique des quatre manuscrits des *Dialogues*
de Jean-Jacques Rousseau

DOBASHI, Yuriko

En 1772, Jean-Jacques Rousseau (1712-1778), hanté du délire de persécution, entreprend de rédiger une œuvre extraordinaire : *Rousseau juge de Jean-Jacques—Dialogues* (1782). Dans cet ouvrage, l'auteur, qui s'estime défiguré et diffamé par l'hostilité unanime des ennemis et du public, fait dialoguer « Rousseau » et « le Français » afin de prouver désespérément l'innocence de « Jean-Jacques » et de dévoiler les injustices qui lui sont faites. Cette œuvre a longtemps été considérée comme un document du délire paranoïaque de Rousseau et tenue à distance par les chercheurs littéraires. Tel était son statut jusqu'à l'intervention de Michel Foucault (1962) et de Jean-Marie Goulemot (1979).

Est-ce pour cette raison que les études non seulement sur leur contenu, mais aussi sur leur rédaction et leurs manuscrits — les études génétiques — n'avancent pas au même rythme que ses autres ouvrages, en particulier *Les Confessions* (Première partie en 1782 et Seconde partie en 1789), ses *Mémoires* ? En ce qui concerne *Les Confessions*, il y a beaucoup d'études faites sur les manuscrits : les recherches représentatives sont *Rousseau et les manuscrits des Confessions* de Hermine de Saussure (1958), plusieurs études de Charly Guyot, celles de Frédéric S. Eigeldinger, etc. Certes, Robert Osmont, éditeur des *Dialogues* de la Pléiade (1959), présente déjà leurs variantes et l'histoire de la rédaction en utilisant trois manuscrits et les petits brouillons des *Dialogues*. Mais on ne peut pas dire que ces études ne soient achevées, parce qu'il manque l'examen d'un manuscrit appelé le manuscrit de BNF. Longtemps mis pour perdu, celui-ci n'a que récemment rejoint les collections de la Bibliothèque nationale de France (1995 ou 1996).

C'est ainsi que, afin de rendre pertinentes les études génétiques des *Dialogues*, il faut tout d'abord transcrire le texte en question pour l'intégrer dans les autres manuscrits des *Dialogues* et mettre en ordre les travaux que les

ジャン＝ジャック・ルソー『対話』の四草稿をめぐる歴史的概要（土橋 友梨子）

anciens éditeurs ont faits séparément. Dans cet article, on présente donc l'ensemble de l'histoire de la rédaction de cette œuvre, y compris des manuscrits, en montrant une partie de la transcription du manuscrit de BNF.

（人文科学研究科フランス文学専攻 博士後期課程2年）